



NANASHINO-TOUHOKU KENJIN
VALKYRIES
SEI 2
SABRA CHRONICLES

登場人物

■ サブラ・グリーンゴールド

本作の主人公。

シャローム学園所属のヴァルキリー。

シャローム学園軍中佐であり、海軍特殊部隊シャイエテット13に所属している。

イスラエルの国益のためならばありとあらゆる悪行を正当化する人間の層である。

S中佐という姉妹同然の親友がおり、声や姿、髪型、身長、体重、腹筋の割れ方まで酷似しているが決して同一人物ではない。

■ レア・アンシエル

シャローム学園所属のヴァルキリー。

サブラとは旧知の仲。

アルカにおいては希有な人間の鑑である。

サブラ・グリーンゴールドとS中佐の秘密を知る数少ない人物の一人。

■ ボアズ・ムーヴァーマン

シヤローム学園の技術将校。

アルカにおける無人兵器開発の権威として知られる生真面目で良心的な男子生徒だが、グレン&グレンダ社の誘いに乗りメカサブラを完成させてしまった人間の屑である。

■ メカサブラ

グレン&グレンダ社が完成させた究極の対サブラ用戦闘マシン。

それぞれ細部が異なる一号機と二号機が存在し、共に全身にビーム砲やミサイルといった大量の兵器を内蔵している戦闘マシンの屑である。

■ バタフライ・キャット

元ヴオルクグラード人民学園所属のヴァルキリー。

肌を露出している箇所が多いほど弾丸が当たりにくくなると信じている人間の屑である。第四次ダイヤモンド戦争でサブラに殺害されたはずだったが……。

■ マリア・パステルナーク

元ヴォルクグラード学園軍大佐及びヴォルクグラード人民学園生徒会長。生前はアルカ最高の英雄と呼ばれていた優秀なヴァルキリーだったが、その正体は自らの権力基盤を盤石なものにするため反対派の生徒達を虐殺した人間の屑である。

■ エーリヒ・シュヴァンクマイエル

民間軍事企業スピリットウルフ社の最高責任者。シュネーヴァルト学園軍時代にはタスクフォース609を指揮した人間の屑である。

■ ノエル・フォルテンマイヤー

民間軍事企業スピリットウルフ社所属のヴァルキリー。最初に生まれたヴァルキリーであり、テウルギストと呼称される人間の屑である。

用語

■ アルカ

アポカリプス・ナウ後の世界を事実上支配している巨大多国籍企業グレン&グレンダ社が考案した、学園同士が世界各国の代理戦争を行う場所。

日本の山形県を丸ごと接收、転用しており、かつての市や町の一つ一つに各国の代理勢力となる学園都市及び軍事施設が配置されている。

■ B F

アルカにおいて代理戦争が行われる場所、通称バトルフィールドの略称。

『高地を三日間守る』、『どちらかが全滅するまで戦う』等、毎回異なった勝利条件と敗北条件が設定される。

■ プロトタイプ

アルカ学園大戦で『学園』というコミュニティの根幹を成す戦闘用の人造人間。

常人の数倍の成長速度と寿命を有し、ほぼ全ての個体が強い戦闘衝動を持つようにプログラムされている。

■ ヴァルキリー

大量生産されるプロトタイプの中で、地球に落下した隕石内に含まれていたマナ・クリスタルという鉱石と、それに含有されるマナ・エネルギーとの親和性を有した少女達。

液化化したマナ・エネルギーが固着して形成されるマナ・ローブを纏うことで戦車の装甲と火力、戦闘機の速度と機動性を人間サイズで実現している。

背部ユニットを使つての飛行やマナ・フィールドと呼ばれる堅固な防御障壁の展開が可能だけでなく、個体によってはグレン&グレンダ社によつてブラックボックス化された強力なマナ・エネルギー兵器を使用することができる。

■ タスクフォース

B Fで代理戦争を行うため、学園軍から一時的に編成される部隊の総称。その規模は十名に満たないものから師団規模の大部隊まで多種多様である。

■ シャローム学園

アルカにおけるイスラエルの代理勢力。

学園都市はアルカ西部のツルオカスタン・カモ自治区にある。

■ トランシルヴァニア学園

アルカにおけるハンガリーの代理勢力。

学園都市はアルカ南東部のフェルニゲシユ・コシユテイ（旧名上山市）。

■ ヴォルクグラード人民学園

アルカにおけるソビエト社会主義共和国連邦の代理勢力。

学園都市はアルカ北西部の港町サカタグラード。

■ ガーランド・ハイスクール

アルカにおけるアメリカ合衆国（米国）の代理勢力。

学園都市はアルカ東部のテンドーシティ。

■ パブリック・スクール・オブ・ブリタニカ

アルカにおけるグレートブリテン及び北アイルランド連合王国（英国）の代理勢力。
学園都市はアルカ北西の海上に浮かぶトビシマ・アイルランドにある。

■ スピリットウルフ社

通称 S W 社。

エーリヒ・シュヴァンクマイエルが立ち上げた民間軍事企業。

アルカ最大の規模を誇り、イスラエルとの結託により絶対的な地位を築きつつある。

■ ダークホーム社

通称 D H 社。

キャロライン・ダークホームを最高責任者とする民間軍事企業。

シエアを巡り S W 社と激しい抗争を繰り広げていたが、現在は事実上の崩壊状態にある。

■ モサド

イスラエル諜報特務庁及びシヤローム学園諜報特務庁。
情報収集だけでなく要人誘拐や暗殺にも長けており、一度ターゲットになればその魔の手から絶対に逃れることはできない。

■ D R F L A

アルカ解放のための民主的改革運動を名乗る反イスラエル武装勢力。

■ エルメンドルフ戦争

一九四八年にアルカで行われた米国とソ連の代理戦争。
アラスカのエルメンドルフ基地に亡命したソ連の新型戦闘機を巡る両国の軍事衝突に端を発して始まり、ガーランド・ハイスクールとヴォルクグラード人民学園の双方が壊滅的打撃を被り共に継戦不可能な状況へと追い込まれて終結した。

■ 第四次ダイヤモンド戦争

一九四九年にアルカで行われたイスラエルとソ連の代理戦争。
アンゴラのダイヤモンド採掘権を巡る戦争でありシャローム学園が勝利した。

■ ヴェーザーシュタディオンの戦争

一九五〇年にアルカで行われたドイツ連邦共和国と英国の代理戦争。
サッカー場での暴動がきっかけとなって始まった戦争でS W社と契約したシュネーヴァ
ルト学園がD H社と契約中のパブリック・スクール・オブ・ブリタニカに勝利している。

■ フレガータ学校占拠事件

一九四七年にフレガータ小学校をテロリストが占拠した事件。
グレン&グレンダ社はこの事件で校内に突入したヴォルクグラード人民学園の特殊部隊
が人質となっていた同社社員の子供達諸共テロリストを殲滅したと公表したが、後にそれ
は悪意に満ちた嘘であることを作戦に参加した隊員から暴露されてしまった。

サブラ対メカサブラ

私は戦士でも常人でもありません。国益のために回る歯車です。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああッ！」

涼しげな声が脳内に響き渡った瞬間、かつてバタフライ・キャットと呼ばれたヴァルキリーは悲鳴を上げながら目覚め、逃げるようにして折り重なる腐肉の中から這い出した。

「……ッ」

黒いショートヘアの頭に猫耳然とした飾りを付けている少女は生まれたての小鹿宜しく床に這い蹲った直後、自分の体臭——つい先程まで埋もれていた死体の山から垂れた汁の耐え難い悪臭——で鼻腔の奥を突かれ、途端に激しく嘔吐し始める。

「何故だ!？」

胃の内容物を全て吐き出してしまった彼女は適度に筋肉が付き、胸元と股間だけを黒く小さいビキニめいた着衣で守っている女性的な丸みを帯びた褐色の肢体のあちこちにこびり付く腐った桃のように柔らかい肉片を引き剥がしながら半ばパニツク状態で声を上げた。

「私は死んだ!」

燃え盛るモスクワ級航空巡洋艦の後部ヘリ甲板上で馬乗りになった相手から振り下ろされたソ連製AK47自動小銃の木製ストックが自分の顔面を叩き壊し、鼻骨や眼球を砕いて破裂させた悪夢のような感覚を彼女は覚えている。

「私は死んだはずだ！」

空しき抵抗を試みていた自分の顔面を潰し続けたせいで壊れて棒状になった木製ストックが喉に突き入れられ、肉や血管、神経をぶち抜いた。はっきりと思い出せる。

「死んだ……私は間違いなく死んだんだ……！」

しかし床の水溜りに浮かぶバタフライ・キャットの顔には傷一つなく、生前の端正さを保ったままだった。第四次ダイヤモンド戦争でアルカの歴史から退場したはずの人物は何度も手で自分の顔を触るが、そこにははっきりとした輪郭や肌の張りが残っていた。

「シャローム学園のものだ」

定まらないバタフライ・キャットの青い双眸が足元に転がっていた鈍光を偶然捉える。「何故ここに？」

G r i n g o l d 1 9 4 6 0 1 3

認識票に刻まれていたその名前を目にした直後、思わず全身を総毛立ててしまったバタフライ・キャットは背後を振り向きついさつき自分が這い出してきた死体の山を見直す。

「これは……」

そして彼女は絶句する。壁に荒っぽく描かれたグレン&グレンダ社のロゴの下に、数百度にも及ぶサブラ・グリンゴールドの死体が積み重ねられていたからだ。

「ここは……まさか……」

驚愕に目を見開くバタフライ・キャットの手から認識票が落ち、床に落ちていたサブラの眼鏡と衝突して小さい音を立てた。

「サブラの墓場……？」



一九五〇年八月二十日。

およそ四十キロ離れたカモ自治区周辺をBFとしてシャローム学園とDRFLAが後に八月戦争と呼ばれる何ら生産性のない小規模武力衝突を繰り返している一方、旧名飛島ことトビシマ・アイランドの砂浜にはアルカ各校の生徒達が束の間の休暇に訪れていた。

「感情の昂りがマナ・エネルギーの働きを活性化し、ヴァルキリーが持つ戦闘能力や治癒能力を大幅に向上させる？」

アルカにおけるイスラエルの代理勢力であるシャローム学園に通うレア・アンシエルは燦々と降り注ぐ太陽の下でビーチベッドに横たわりながらモサドからの報告書に目を通す。

「眉唾ね」

今はオリードラブの軍服ではなく控えめな水着に身を包む予備役のヴァルキリーは切れ長の目を細め、ショートカットの髪を揺らしてクリップ止めされた書類を捲った。

「で、サブラマンってなによこれ」

「道徳的にも社会的にも正当化されたイスラエルというユダヤ人国家のために戦う正義のヒーローが四十三年後の未来を舞台に宇宙怪獣と戦う特撮番組です」

レアが再生紙を下げると、そこには書類に添付されていた写真の中で赤白の模様をスプレーペイントしたウインドブレーカーを羽織り、ジーンズにスニーカー、軍手という格好で巨大なフナムシと格闘していた百七十センチはある長身の少女の姿があった。

「サブ……いいえS中佐、それグラビア用でしょ。もう少し大人しいのはなかったの？」

ただ彫刻のように美しい六つに割れた腹筋や逞しい上腕二頭筋から海水を滴らせる長い黒髪の少女の健康的な肉体を今覆っているのは写真とは違って面積の少ない水着である。

「うわ……スゲエ……」

「雑誌によく載ってる人だろ、多分……」

シニガミマガジン（注1）用の水着を纏っているS中佐——機密保持の観点からタスクフォース・ハヘブレを指揮するシャローム学園最強のヴァルキリーこと、サブラ・グリーンゴールドと姉妹同然の関係にある人物と自称している将校——の強烈な水着姿を目にした休暇中の他校の男子生徒達は例外なく相次いで顔を真っ赤に変える。気まずそうに前屈みになって足早に海へと駆け込む者も少なくなかった。

「私の水着姿以上のものを普段見ているレアさんらしくない発言ですね」

深い意味を持たせたような口振りでS中佐がそう言った直後、二人の近くでビーチベッ

ドに横になっていたトランシルヴァニア学園の女子生徒達が飲んでいたヌカ・コーラを思い切り嘔き出し、目を丸くしながらひそひそとハンガリー語で噂話を始める。

「アンタが素っ裸で家の中をほっつき歩いてるだけでしょ！」

レアは額に青筋を浮かべてキブツ（注2）にある学生寮の一室で同居しているルームメイトを怒鳴りつけ、全く……と脂汗の滲む頭に手を当てた。

「まあいいわ。そうそう、アンタなら別に問題ないとは思うけど、休暇中とはいえ明後日には任務に戻るんだから変な男に引っ掛かったりしないよね」

「ご心配なく。私はレアさんしか見ていませんので」

度が入っているのか入っていないのか本人もよくわかっていない眼鏡のレンズ奥にある紫の双眸に妖しい光を湛えてS中佐はそう言う。

「だから変な誤解を招く発言はやめろっつーの！」

生唾を飲み込んで二人の話に聞き耳を立てていたトランシルヴァニア学園の女子生徒達がひやああと声を上げて真っ赤になると、自分を百合の園の住人にしかねない同居人に対してレアが口から炎を吐くほどの勢いで怒りの声を発するのはほぼ同時だった。

「全くもうホントに……」

戦闘時以外は人間産業廃棄物と言っても過言ではないS中佐……サブラの混沌とした言動に起因する頭痛を覚えながら浮き輪片手に海へ疾走し案の定波にさらわれる彼女を見送ったレアは、ふと視界の端に見覚えのある人物が映っていることに気付く。

「あの」

ガリル自動小銃を背中側にスリングで掛けた状態でビーチベッドを離れたレアは所在なさげに白衣を纏って砂浜に立つ人物に声をかける。

「ボアズ・ムーヴァーマン博士ではありませんか？」

「あっ……」

「研修でお世話になったタスクフォース・ハヘブレのレア・アンシエル中尉です」

「ど、どうも。お久しぶりです、アンシエル中尉」

シャローム学園の学生服の上に白衣を羽織り、眼鏡をかけた真面目そうな細見の少年と握手を交わしたレアはその相手が自分のことを覚えていないことを一瞬で見抜いたが、それが悪意によるものではなく、女性に慣れていないせいで水着姿のヴァルキリーの前で目のやり場に困っている彼なりの少しずれた気遣いであることを悟る。

「お久しぶりです」

マリア・パステルナークほどではないが、シャローム学園のボアズ・ムーヴァーマンといえればアルカという小さな世界の中ではそこそこ有名な名前だった。健康面に問題を抱えた状態で生産されてしまった彼は国家間代理戦争の尖兵というプロトタイプ本来の役割には不適合だったが技術者としては特筆すべき存在で、何の支援もなく誰一人理解者がいない中で無人兵器開発に打ち込み、開始から僅か二年後にグレン&グレンダ社に逆輸入のよいうな形でドローン（注3）を正式採用させる等の輝かしい実績を残していた。

「お元気そうで何よりです、博士」

しかし実際のところレアはボアズの技術者としての功績よりも、自分の置かれた境遇に泣き言一つ漏らさず、ただひたすらに手を動かして汚名を返上し立場を得た彼の精神力や忍耐力に強い共感や敬意めいたものを感じていた。

「今日も研究の関係で？」

「うーん……まあ、そのあたりですね」

ボアズはレアにどこかぎこちない笑みを返す。

「新しい研究のテストみたいなのがあるんです」

「なるほど」

心に引っ掛かるものがあつたがレアは小さく頷く。

「今日はS中佐も一緒なんです。ご紹介しますよ」

「サブ……失礼、S中佐がここに来ているのですか？」

「はい」

レアが肯定した瞬間、ボアズの顔に深い闇が見え隠れしたことに彼女は気付かなかつた。

「申し訳ありません。急用を思い出したので失礼します」

「えっ」

ボアズは困惑するレアを一人残し、踵を返して足早に砂浜を立ち去ってしまふ。

「相変わらず変な人ね。でも技術屋ってそういうものなのかしら」

レアは先程生まれたい心の引っ掛かりが疑念に変わっていく気がしたが、それは考え過ぎだと自分に言い聞かせてまたビーチベッドへと戻った。

この疑念は、今から彼女にとって最悪の形で具現化することになる――。

注1 アルカにおいて非合法に販売されているヴァルキリーのグラビア写真が掲載された月刊雑誌。シニガミ（死神）とはヴァルキリーの暗喩である。

注2 学生寮や図書館等が立ち並ぶシャローム学園の生活共同体地区。

注3 無人機を意味する。



足早に今はブラッド・シーと呼ばれる日本海上に浮かぶ島の砂浜を後にしたボアズは逃げ込むようにしてここまで乗ってきた軍用車の中へと戻った。

「先行者こそが成功者になれるとは限らない。後発に追い抜かれることもある……」

ボアズは項垂れるかの如く手汗がたっぷりと染み込んだハンドルに額を押し当ててみる。

「僕はサブラ・グリーンゴールドが憎いわけじゃないんだ」

胸中の素直な感情を吐露する少年の反対側の座席にはS中佐直筆のサインが描かれた彼女の水着グラビア写真がスリーブを三重にかけられた状態で置かれている。ボアズはこれ

を大切にしている一方、自分の目で直視することができなかつた。見るたびに制御不可能な情念が胸中で渦巻き、体調にまで悪影響を及ぼすからだ。

「僕は彼女の大ファンだ。誰よりも応援している。尊敬もしている。でも……！」

ボアズは殴り付けるようにしてダッシュボードの中にある無線機を手を取った。

「目標はトビシマ・アイランドにいる。最終調整は中止、あれを発進させる！」



一九四八年にエーリヒ・シュヴァンクマイエルからアルカ学園大戦の凄惨な実像を世界中に暴露され、加えてエレナ・ヴィレンスカヤによるフレガータ学校占拠事件の真実公表で追い討ちをかけられたグレン&グレンダ社の威信は完全に地に落ち、今や世界の絶対的支配者とは彼らではなくユダヤ人を指すのではないかとも言われている。

「出撃準備」

その事実こそシャローム学園諜報特務庁モサドが旧名月山……ルナ・マウンテンにグレン&グレンダ社の秘密基地が存在し、そこで恐るべき戦闘マシンが開発されていることを早い段階で察知していたにも関わらず、イスラエル本国がそれを真に受けなかつた理由の一つだった。彼らはかつてマリア・パステルナークの暴走やラミアーズの台頭を防げなかつたグレン&グレンダ社と同じ過ちを犯したのだ。

「了解。スタンディングポジション」

電子音声の無機質なやり取りと共に、主導権を世界中のユダヤ人に奪われつつある巨大多国籍企業が社内に残されたりリソースの全てを結集し、スヴァログやチェルノボーグといったヴォルクグラード人民生徒会が独自に開発した機動兵器の技術までも投入して開発させた史上最強最高の対サブラ用戦闘マシンがドックの中でゆっくりと垂直に起立していく。「冷却液、注入開始」

続いてサブラ・グリーンゴードは複数の同一個体が存在しているという情報を内通者から得たグレン&グレンダ社がアルカ各地から秘密裏に回収した彼女の骨をメインフレームとして組み込んだ最終兵器にクーラントが注入され始める。

「ヘッドアーム、オープン」

まずオリジナルのそれがそのまま使われている頭部を覆っている囲いが展開し、

「ボディアーム開け」

次にブルーダイヤモンドコーディングが施された腹部装甲を隠す拘束具が別れて後退、「リフトアップ」

そしてサブラを倒すにはサブラこそが最も適しているというシンプルな理由で本人と同じ形をしている戦闘マシンはエレベーターによって上へ上へと持ち上げられた。

「ボディアーム全開」

遂に開いた秘密基地の上部ハッチから全身が外に出終わるなり黒く猛々しいボディアーム

ムがゆつくりと胴体から離れ切り、機体各部のラジエターから蒸気が排出され、

「スタート、メインエンジン」

体内に埋め込まれている、サブラの骨や細胞に残っていたマナ・エネルギーから強引に複製したマナ・クリスタルが始動すると同時に赤い瞳が輝きを放つ。

「発進！」

前進翼式飛行ユニットと足の裏にあるブースターから血のような粒子を噴射して離陸していくマシンの正式な形式番号はマシン・ソルジャー一号機を意味するMS・01という。

しかし実際のところ三年半に渡りこのマシンの開発に携わったボアズ・ムーヴァーマンは『彼女』を別の名前で呼んでいた。

機械のサブラ——メカサブラと。



「あのねえ」

ヒトデや海藻と共に砂浜に打ち上げられて口から勢い良く海水を噴き出しているS中佐を目の当たりにしたレアは眉間に深い皺を寄せる。

「アンタ腐っても海軍特殊部隊の隊員じゃない。なのに泳げないってそれどうなのよ」
「泳げないのではありません」

突然真顔になったS中佐は豊満な胸を上下に微震させながら起き上がる。

「私は足が着く場所では泳がないのです」

「全くもう……わかったから大人しく向こうでアメフラシでもつついてなさいよ」

「私は今まで一度たりとも溺死した経験はありません」

「あるわよ。二十二回も」

苦々しげに即答したレアの表情の曇りを見逃さなかったS中佐は彼女にその理由を聞くとしたが、直後の爆発音がそれを阻んだ。

「あそこはDH社の跡地がある場所ですね」

弾かれたように同じ方向を向いた二人の視線の先には立ち昇る黒煙があった。

「でもSW社はもう撤退しているはずよ」

レアの言う通りつい九日前、トビシマ・アイランドではアルカ最大手の民間軍事企業であるSW社とその座を奪わんとするDH社が激しい戦闘を繰り広げていた。戦いはエーリヒ・シュヴァンクマイエル率いるSW社がライバル企業の本社社屋を制圧するという形で終わったが、両社の兵士達は既にこの島から完全に姿を消しているはずだった。

「休暇を終了します」

「ちよっ……」

人間不良品のS中佐からテルアビブのマリア・パステルナークと畏怖される戦乙女、サブラ・グリーンゴールドへと変貌した少女は一体どうやったのか見当もつかない早業でオリ

ーブドラブの軍服に着替え、その上に南アフリカ共和国製チェストリグを羽織った。

「固着」

彼女は啞然とするレアの前で右手首のマナ・クリスタルを操作する。

「ああもう！」

レアは腰から伸びる支持架に装着された背部飛行ユニットから左右に延びる、イスラエルの国籍マークと敵味方識別用の黄色い三角形が描かれた前進翼を空中で翻し、安全装置を外したガリル自動小銃を携えて何かに引き寄せられるかの如く煙の場所へと急行するサブラの青い光跡を追いながら砂浜を疾走し始めた。

「アンタは一体何回死ねば独断専行は危ないってことを理解するのよ！」



「殺される！ た、助け……」

七分十二秒前、DH社の跡地でシャローム学園と戦うための武器弾薬を拾い集めていたところを攻撃されたDRFLA所属のヴァルキリーは海岸線から自分達のいる場所へ飛来してきたサブラ・グリーンゴルドの姿を見て愕然とする。何故なら――。

「ってサブラ!？」

先程、何の脈絡もなく自分達に襲い掛かってきた存在もまたサブラだったからだ。

レバーの前にあった二つのランプが赤く点灯した直後、サブラと対峙していたもう一人のサブラの全身がマグネシウム・リボンのそれに似た激しい閃光を放って燃え始める。

「グレン&グレンダ社も驚いているだろう」

ボアズがレアと話していた時とはまるで別人のように狂気を孕んだ低い声で言った直後、深い業によって生み出された究極の対サブラ用戦闘マシンがアルカの地に姿を現した。

「前世紀の終わり……」

四本の鋭いクローが付いた機械の足。

「巨大隕石の落下と……」

大型ミサイルの弾頭が剥き出しになった膝。

「それがきっかけになって始まった十五年間にも及ぶ世界規模の戦争が人類に歴史上類を見ない未曾有の被害をもたらしました」

軽快なモーター音を鳴らして回転する両手のフィンガーミサイル。

「混乱はグレン&グレンダ社によって収められました」

リベット打ちの左手前腕部に刻まれた赤い『MS』の文字。

「そして同社は今後一切、人々が争わずに済む世界を作ろうと考えます」

威圧するかのようにして点灯する真紅のカメラアイ。

「それが戦闘用の人造人間『プロトタイプ』を教育し」

オリジナルの腹筋を模して六つに割れた腹部装甲。

「世界各国の代理勢力である『学園』に所属させ」

黄色から赤に変わった粒子を絶えず放出し続ける異形の背部飛行ユニット。

「アルカという永久戦争地帯でそれぞれの母国の代わりに戦わせるシステムなのです」

足元から視線を上げていったサブラの前でメカサブラは左手を広げ、中指で防弾加工が施された眼鏡を直す。無機質な眼光だけが顔を隠した指の間から見え隠れした。

「そして今や民族対立、資源の利権争いといった国家間の問題は全てアルカにおける代理戦争で処理され、人類にとって永遠に過去のものとなりました」

すっかりお馴染みとなったグレン&グレンダ社の不愉快なラジオ放送が終わるなりボアズは「よし」と力強く呟いてまた別のレバーを二つ倒す。緑色のランプが点き、メカサブラは両手を前に出しフィンガーミサイルの発射体勢を取る。

赤い第一関節から先がミサイルとして撃ち出されると同時に手の甲が開いて後方への排煙が行われ、すぐにメカサブラの体内で生産された超小型多目的誘導弾が次から次に指のように生えてきてはハイペースで放たれていく。

「武器を内蔵している」

「言っただろう！」

怨敵と会話が成立してしまっていることなど想像すらしていないボアズはマナ・フィードで殺到するフィンガーミサイルを防ぐサブラに更なる攻撃を仕掛ける。

「君と同じ性能だと思ったら大間違いだ！」

メカサブラは一旦何かを溜めるように頭を少し後方に振り、目からビームを放つ。

「マナ・エネルギー兵器まで」

口調はいつも通りの涼しいものではあったが、マナ・フィールドを虹色の光線で強打されたサブラは自分が相当に危険な状況にいることを察した。

元々は防御用火器として用意されたものの予想外に出力が高かったため攻撃用へと変更されたスペースビームと純粋な破壊手段であるフィンガーマイスイルの弾幕の僅かな切れ目を縫い、サブラはまだSW社やDH社の戦車及び自走砲が少なからず回収されないまま残骸となって放置されているトビシマ・アイランド西側の戦場跡を滑走し始める。

サブラは白煙を残して自分を追い掛けてくるフィンガーマイスイルを急機動で自滅に追い込み、進路を予想して放たれるスペースビームを角度を付けたマナ・フィールドの展開で受け流すようにして低空飛行を続けながらメカサブラに対抗できそうな重火器を探す。

「ありました。終わりです」

ヴェーザーシュタディオンの戦争時にキャロライン・ダークホーム率いる民間軍事企業のクローンヴァルキリーによって運用されたであろうマナ・パルスランチャーを発見してすれ違いざまに拾い上げたサブラは緩やかな円を描いて着地するなり足を前後に大きく開き、砲口の先で微動だにしないメカサブラにその照準を合わせた。

「へえ」

モニターの前でメカサブラと同じように左手を広げて中指で眼鏡を上げたボアズは愉悦

で口元を緩めるだけで自慢の戦闘マシンに一切の回避機動を取らせない。むしろ彼はこれから起きるであろう喜ばしい光景を早くこの目で見たかった。

サブラが構えたマナ・パルスランチャーから爆発的なエネルギーが放出されて一直線にメカサブラへと向かっていく。しかし全身を鋼鉄の数倍の強度を持つスペースサブラニウムで覆い、更にそれをダイヤモンド・コーティングした戦闘マシンは戦車一台丸々消滅するレベルの光芒に巻き込まれても小さな傷一つその装甲に付けなかった。

「プラズマ・グレネイド、オンスタンバイ」

ボアズがスイッチを操作すると内部で先程受けたマナ・パルスランチャーの攻撃をプラズマ・エネルギーに変換中のメカサブラの腹部装甲が左右に展開した。

「ファイア！」

ボアズは軽やかな動作で発射ボタンを押す。直後、メカサブラの全身が青白く発光し開いた装甲の中にあつた砲口から何十倍にも増幅されたエネルギー流が撃ち出される。

「——ッ」

サブラは反射的にマナ・フィールドを最大展開するが、彼女の視界だけではなくボアズのモニターすらもホワイトアウトさせるほどにメカサブラから放たれたプラズマ・エネルギーは膨大だった。踏み止まってエネルギーの潮流に耐えるサブラの周囲が抉られ、戦車や装甲車の残骸が跡形もなく光の中で溶解していく。

「これはグレン&グレンダ社の命令によるものですか？」

焼け野原の中でゆっくりと交差させて顔を守っていた両手を下ろすサブラから震え声で問われたボアズは「違う」と即座に否定した。

「今までもそうしてきたように、僕は自分が置かれた現状を変えるために行動している」
メカサブラは一旦青い腹部装甲を閉じ、右手を前に出して空へと飛び上がったサブラに
対し三度フィンガーマサイルを放つ。

「技術者としての僕の矜持を酷く傷付け、誇りや名誉を奪ったのは他でもない君だ」

ボアズはモニターの中でサーカス然とした機動を繰り返しミサイルを回避し続けるサブ
ラの姿を分厚い眼鏡のレンズ越しに裸眼では視力が○・○四しかない瞳で追った。

「怨恨ではない。愛でもない。そして誰に対するものなのかも正直わからない」

ボアズは幾筋もの白線——メカサブラの体内で無限に生産されるミサイル——に追われ
て空に大きく左に弧を描くサブラの予想進路を瞬時に計算し、手元のジョイスティックを
操作してメカサブラの頭部を右上に向けさせた。

「でも僕は、この身を引き裂かれるような情念に突き動かされて今ここにいる」

スペースビームが赤い双眸から放たれ、その直線上にいたサブラが爆発に包まれる。
「一方的と笑ってもらって構わない」

両足の爪を地面に突き立てながら前進するメカサブラは背部飛行ユニットの機体上面を
開き、そこに内臓されていた曲射弾道式の多目的誘導弾を地面に叩き付けられ、吐血しつ
つも激痛に耐えながらゆっくりと起き上がろうとするサブラに対して次々に発射した。

「愚行なのは億も承知！」

緩やかな曲線を描いた白煙がコルダイト火薬の臭気を切り裂いて四方八方から球体のように青いマナ・フィールドを展開したイスラエルの歯車に襲い掛かる。

「君にはわからない人間の感情だ！」

撃ち出されると外向きに一旦弧を描いてから目標への直進を始めるミサイルはまるで大振りのフックのように左右からサブラが展開した光壁を激しく殴打した。

「歯車の君にわかるはずがない！」

ボアズはモニターの中でミサイル攻撃に耐えながら歯を食い縛り、軍服に血の染みを作っているサブラを睨みつつ強い憎悪を込めて言い続ける。

「歯車の君にわかってもらおうとも思わない！」

マナ・フィールドで防がれているためミサイルがサブラに直撃することはない。だが、その衝撃や大音響は少しずつだが確実にサブラの肉体にダメージを与えていた。光壁の表面で炸裂が起きるたびに彼女の傷口がプロトタイプやヴァルキリー特有の超回復によって塞がる速度よりも速いペースで開き赤黒い血液を地面に滴らせていった。



二つの歯車が死闘を繰り広げているトビシマ・アイランドの上空を一機のフランス製ア

ルエット輸送ヘリが飛行していた。

「ファルケ2・1よりアドラー1・1、目標を確認しました」

狼の横顔を模したロゴが機体に描かれているヘリはサブラとメカサブラが砲火を交える様子をカメラ越しにヴェーザーシュタデイオン戦争の深い爪痕がまだ残るタカハタベルクに建つSW社のアルカ営業所へと中継する。

「サブラはあれが自分から作られたマシンだと知って近付いてきたんだろうか」

長方形でこれといった特徴のないヨーロッパ風の巨大な建物内にある執務室で同社の最高責任者であるエーリヒ・シュヴァンクマイエルはヘリからの映像をモニターに映しながら自分の胸中に浮かんだ素直な疑問を口にする。

「かもしれないね。あの二つは姉妹みたいなものだから」

「姉妹なんかじゃない。文字通りの分身だよ。同じ歯車で――」

左目を眼帯で覆うボーイッシュな乙女然とした少年は足を組んでソファに腰掛けているノエル・フォルテンマイヤーの見解を否定した。

「一方は機械のような人間」

エーリヒはまず最初に雨霰と降り注ぐ多目的誘導弾やフィンガーミサイルの中を駆け抜けてメカサブラに銃撃を浴びせるサブラを見る。

「もう一方は人間のような機械」

そして次に微動だにせず弾丸を弾き返して目から光線を放つメカサブラに視線を移した。

「エリーはどうなると思う？」

ノエルは眼鏡の奥にある爬虫類じみた縦スリットの赤い瞳でグラス内の氷と飲み物を覗き込みながら、ショートカットの金髪を微震させつつ長い付き合いのある少年に問う。

「勝った方が僕達の敵になるだけだよ」

エーリヒは即答を百八十センチを超える長身のヴァルキリーに返した。



撃ち落としても撃ち落としても迫ってくる大量のフィンガーミサイル群に追われ続けるサブラは急降下し、地面スレスレで高度を上げて白煙の源を自滅に追い込む。

「あれは」

サブラはなおも追い掛けてくるミサイルを振り切り、体勢を整えるための一時的な隠れ蓑としてエルメンドルフ戦争の際、ヴォルクグラード人民学園空軍の攻撃により大破して海岸に打ち上げられたアトランタ級軽巡洋艦の残骸に逃げ込んだ。

「クラスタミサイル、用意」

危機を感じたカモメ達が一斉に飛び立った直後にフィンガーミサイルが錆びだらけの船体表面で炸裂するも、装甲そのものは破れない光景をモニター越しに視認したボアズは着陸させたメカサブラの新たな兵装を準備する。

「クラスターミサイル、発射」

ボアズがボタンを押すと折った右足を前に出したメカサブラの膝から迫撃砲弾のように面制圧を行う大型ミサイルが撃ち上げられ、十分な高度を取るや否や空中で炸裂して凄まじい鋼鉄の豪雨を本来の役割を終えた軽巡洋艦に見舞った。途端に濃厚なコルダイト火葉の悪臭が海岸線一帯に広がる。

「オールウェポン——」

メカサブラは自分が自ら檻の中に入ったことを悟ったサブラが脱出する前に彼女をアトランタ級の残骸ごと叩き潰すための全兵装攻撃を開始する。

「ファイア！」

ボアズがモニターの画面に唾を飛ばした瞬間、メカサブラの両手と背部飛行ユニットから大量のミサイルが放たれた。直線と曲線を描いて殺到した白煙は一つの例外もなくアトランタ級軽巡洋艦の残骸へと吸い込まれ、第一撃でその艦橋を倒壊に追い込む。

ボアズは多目的誘導弾の発射を自動に切り替えると、次に機体に用意されているスペースビームとプラズマ・グレネイドをメカサブラから発射させた。

スペースビーム、フィンガーマサイル、プラズマ・グレネイドの絶え間ない連撃！

フィンガーマサイル、スペースビーム、プラズマ・グレネイドの絶え間ない連撃！

スペースビーム、フィンガーマサイル、プラズマ・グレネイドの絶え間ない連撃！

フィンガーマサイル、プラズマ・グレネイド、スペースビームの絶え間ない連撃！

フィンガーミサイル、プラズマ・グレネイド、スぺースビームの絶え間ない連撃！
 プラズマ・グレネイド、フィンガーミサイル、スぺースビームの絶え間ない連撃！
 プラズマ・グレネイド、スぺースビーム、フィンガーミサイルの絶え間ない連撃！
 プラズマ・グレネイド、フィンガーミサイル、スぺースビームの絶え間ない連撃！
 フィンガーミサイル、プラズマ・グレネイド、スぺースビームの絶え間ない連撃！

全身が硝煙とフィンガーミサイル及び多目的誘導弾の発射煙で見えなくなるほどの凄まじい全兵装攻撃が開始されてから七分十二秒後、モニターに表示されたオーバーヒートの警告文に気付いて射撃を停止したボアズは大爆発を起こしたアトランタ級軽巡洋艦の残骸からサブラが背中に炎を纏いながら飛び出してくる光景を目の当たりにした。

「まだ生きていたのか……！」

ボアズは舌打ちする。メカサブラには常時ラジエターをフルに使えるだけのエネルギーを賄えないという重大な欠陥があり、戦闘が始まった場合はオーバーヒートを起こす前に遠距離戦闘によって一気にサブラを倒さなければならなかったのだ。

「冷やさないと駄目か！」

スぺースビームを回避し背中の炎が一瞬で消える素早さでメカサブラに肉薄したサブラは最初に右のエルボーを自分と同じ顔の左頬に叩き込み、その勢いのまま左足を軸として左一回転し右の踵を相手の左側頭部に見舞った。

「クソッ！」

オーバーヒートを起こし、サブラに近接戦闘に持ち込まれる——これはボアズとメカサブラにとって考え得る最悪のシチュエーションだった。

「それでも！」

しかしボアズとて策を怠っていたわけではなく、メカサブラは殴打された勢いを利用して身を屈めながら右に一回転、その中で右足に仕込んでいたチェンソーを展開させて高速回転する刃による足払いを仕掛ける。

「鈍過ぎますね」

易々と避けたサブラは最終調整が終わっていない状態で出撃してしまったが故に近接戦闘における反応の鈍さを露呈してしまったメカサブラの背後に回り込み、本人同様に形の悪い顎下に右手を潜り込ませ、次に手首を左手で掴み、上半身ごと体を左に捻った。

「あまりにも鈍過ぎます」

ネッククランクと呼ばれる関節技である。

「ロケット全噴射！ 脱出！」

ボアズは必死にボタンを連打するが、モニター内のサブラは体重をかけて無理矢理足裏と背部飛行ユニットのブースターで離脱しようとするメカサブラを地面に押し付け、死に体に追い込んでどんどん首を締め上げていく。

「クソッ……こんな時に……ッ！」

トビシマ・アイランドの某所でボアズが突然激しく咳き込みながら吐血するのと同時に

メカサブラの額の傷口からオイル混じりの血液が溢れ出し、圧潰音と共に首が曲がっていくにつれて内部の回路がショートした両目が点滅し始める。

「百ドルの値打ちもありませんね」

サブラは完全に頭部が百八十度回り切り、とうとう煙まで立ち昇らせ始めたメカサブラの顔面に躊躇なく右肘を叩き込む。首がもげ、配線だけでだらりと背中側に垂れた。

「私の勝ちです」

サブラがそう言い放った瞬間、口元を鮮血に染まる手で押さえたボアズの最後の指令を受けて再起動したメカサブラが彼女の胴体にしがみつく。

「サブラニ死ヲ」

背中側にぶら下がる頭部から奇怪な電子音声を発したメカサブラは首の断面から数本のワイヤーを放出し、両腕を巻き込むようにして反応が遅れたオリジナルの全身を拘束した。

「サブラニ死ヲ」

メカサブラの全身から断末魔の絶叫にも思える赤いマナ・エネルギーの粒子が大量に放出され始める。それが一体何を意味しているのかをサブラは瞬時に理解する。

「自爆——ッ」

サブラがレアの笑顔を思い浮かべた瞬間、彼女はメカサブラ諸共爆発の閃光に包まれた。

製本版に続く



<http://utsutenkai.web.fc2.com/>